

グズノフ：ヴァイオリン協奏曲 イ短調 Op.82

アレクサンドル・グズノフ（1865-1936）は、チャイコフスキー後のバレエ音楽、「ライモンダ」、「四季」などで有名な、近代ロシアの作曲家である。リムスキー・コルサコフに作曲を学び、わずか16歳で出世作となる「交響曲第1番」を初演。音楽家のパトロン（支援者）として有名なミトロファン・ベリヤーエフがその活動を始めたのも、この時の感動がきっかけになったといわれている。ベリヤーエフの紹介でヨーロッパ・デビューし、晩年のフランツ・リストからも才能を認められた。1899年からペテルブルク音楽院の教授もつとめた。

グズノフの創作の頂点をなす「ヴァイオリン協奏曲」は1904年に作曲され、翌年レオポルド・アウアーのヴァイオリンによって初演された。アウアーはハンガリー生まれの名ヴァイオリニストで、1917年までグズノフと同じくペテルブルク音楽院の教授をつとめていた。グズノフは彼の助言を得ながら、独奏パートを作曲した。

全体は「モデラート～アンダンテ」、「アレグロ」の2つの部分に大きく分けられるが、楽章の区切りはなく自然に移行する。最初の部分を2つに分ける分析もあるが、主題に共通の要素が強いことを考えると、ひとまとめにできる。「モデラート」の部分では、スラヴ的なほの暗い第1主題と優美な第2主題が、独奏ヴァイオリンから提示される。これが一段落すると「アンダンテ」となり、独奏ヴァイオリンが第1主題に通じる甘美な主題を提示する。続いてほの暗い第1主題が再び登場、第2主題とともに展開され、技巧的なカデンツァへと至る。トランペットのファンファーレとともに「アレグロ」に入り、民俗舞曲風の活気に満ちた音楽となる。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン ※スコア上の表記